

出港を待った。十三日朝出港したがシケで難航し、十四日夕方、博多港へ入港した。途中死者が出て隊長以下全員参列して水葬したことは一生忘れられない。

十五日午前、船中で部隊解散式挙行。午後より下船して検疫後、米軍立合いのもと復員貨物列車に乘車し故郷へ向かう。午後五時の発車で途中大阪駅で客車に乗り替え、十六日午後五時、岐阜駅で下車。焼野原の市内を徒歩で七時間無事故郷へ復員しました。

妻は家出、年老いた父一人私の帰りを待っていました。想うに私は元気で復員しましたが多くの戦死者や、母国へ上陸前に船中で亡くなられた戦友を思う時、ほんとうに済まない思いで一杯です。ご冥福を祈りつつ暮しております。

服従を強いられた

中国四千余キロの道のり

岐阜県 安江 関一

日支事変の戦雲が色濃くなり、つづいて日米開戦とミリタリズムの激流は国内を戦場と化す態勢に押し進めた。男は戦闘帽にゲートル巻き、女はモンペ姿が日常の服装となり、この頃の人気者の中心はなんといても軍服姿であった。

「今の代は星（陸軍）に錨（海軍）に闇に顔」の諺が流行したことが記憶にある。闇物資も顔がなければ入手できなかつた。つづいて物資の欠乏は深刻となり、食糧や衣料の統制へと押し進み、「欲しがりません勝つまでは」「撃ちてし止まん」という合言葉が毎日のように繰り返された。戦雲渦巻く悲惨な若者の時代であった。

そうした国家存亡の秋、われわれは国の至上命令に

より、拒否も選択も許されぬ戦場において総てを打ち捨て、錦の御旗のもと死を前提とし、降伏も撤退も許されぬ熾烈な最前線の軍務を遂行したものであります。

まず歩兵六十八連隊を出陣する日も私たち初年兵は全然知らず、極秘のうちに進められた。何となく雰囲気で察知した時はすでに冬の完全軍装で護国神社への参拝があった。私はこれは明日にでも出陣しそうだと思いを強め、参拝の行軍途中、道行く人を呼びとめ両親への電報を伝言。そのかいあって出陣の当日父母に会うことができ、心おきなく輸送列車に乗り込みました。

兵隊全員の乗車が完了すると列車の窓は全部閉ざされて発車。列車内では、初年兵同志で行先きは満州だとか、北支へ行くのだとか、不安めいた話のうち、一昼夜半かけて博多に着いた。ここから輸送船で朝鮮の釜山港へ。軍用列車に乗りかえて平壤、新安州を経由し新義州に到着した。この日は朝着いたので私達初年兵は一週間ばかり顔を洗っていないので新義州駅で洗

顔しましたが、十二月二十日過ぎのこの辺りの朝の寒さは生れてから味わったことのない寒さで、氷点下三十度以上だったと思う。

そして新義州を後にして鴨緑江を渡った時はもう行先は満州に間違いないと思っていました。満州吉林省の沈阻から錦州そして山海関を経由し、万里の長城を右手に見て唐山へ、そして山東省の德州、済南、さらに徐州と進み、河南省の浦口に到着し、そこで揚子江を船で対岸の南京に渡り、南京の兵站にて正月を迎えて、四日後さらに揚子江を輸送船にてさかのぼり漢口に着き、直ちに兵站に入りました。

しかし私達より先に南京を出航した歩兵第六連隊の輸送船が魚雷によって撃沈されたので、私達初年兵は、歩兵第六十八連隊と歩兵第六連隊とに分割された。私は運悪く歩兵第六連隊に配属となり、この時ほど残念なことはなかった。というのは歩兵第六十八連隊に行けば従兄が中隊長でいることと、原隊を出発以来の同郷の戦友と別れることでした。

そして私達は歩兵第六連隊となり、漢口より無蓋車

にて雪の降りしきる貨物列車で広水に到着下車しました。そしてボタン部隊で勇名な歩兵第六十八連隊の営内より聞こえる軍靴の音と軍歌のひびきを聞きながら、徒歩行軍にて一路第三師団司令部のある応山を経由したあたりで、上官よりこの辺より敵の攻撃が度々あるので行軍も警戒を要するとの伝達がありました。あちこちからの銃声を聞きながらわれわれの目的地である歩兵第六連隊のある石家へと行軍すること二日ぐらいで最前線の石家の営門に到着した。そしてこれより過酷な軍務の毎日が始まったのです。

私達のような現役兵の現地入営は、内地での入営兵より内務に付いての教育は多少なりとも楽だと聞いておりましたがまったくの大違いで、内地以上に厳しく、営内へ入ると同時にこの最前線ではそんな甘い考えは許されるはずがないと身をもって感じさせられた。

そして初年兵として、まづ軍人勅諭の読法の暗読をおし、天皇の兵士たる自覚と服従の念を肉体にきざみこまれる。営内の生活は、起床から消灯まで学科教育と実戦演習に明け暮れ、最前線での軍隊にかかわる

基礎知識を徹底的に体にたたき込まれました。なかでも服従は軍隊内の勤務令ともいえるべき内務書において「服従トハ上下トノ區別ヲ乱サズ下タル者は上タル者ニ従ヒ其ノ命令通りニ諸般ノ事ヲ服行シ己ノ任務ヲ速ニ実行スルヲ伝ウ之ヲ一家ニ例ウレバ子父母ニ服シ妻ノ夫ニ従フガ如シ若シ子ニシテ父母ニ服セズ妻ニシテ夫ニ従ハザルトキハ如何シテ一家ヲ維持スルヲ得ンヤ服セザルベカラズ従ハザルベカラズ」

と説かれ、「服従は軍紀の因つて起る基」と位置づけられていた。それだけに軍隊内務の生活では、闇雲に服従々と馬鹿でも頓馬でも上官となれば一も二もなく恐れいつて、その事の如何を問わず直ちに絶対服従によつて成り立つ軍隊精神を強要された。そしてまさしく「真空地帯」にふさわしく厳然たる階級序列の下に絶対服従とあらゆる無法がまかり通っていた。

従つて初年兵時代は地方で身につけた人間としての誇りも完全に打ちくだかれ、命令にただただ従うだけの一個の意志なき戦う道具にすぎなかつた。そして初年兵の教育期間を中途にして作戦につく作戦と出撃す

るうち、つづいて大東亜戦争へと過酷な最前線の泥沼の中へと行動していったのです。

駐屯地石家を出陣し江西省の茶陵、湖南省道県そして広東省の梧州、桂平、黎塘と進撃し広西省南寧へと南支那の最南端近くまで進撃したのである。

茶陵道県の設営のひとつに、

泥田路、いつまでつづく南方に

茶陵の塔や 見えつつ遠し

最前線 せばめて邁ひし 他部隊に

故郷たずねり 兵らも我も

今に思えば故国に報道される勇戦ぶりとはうらはらに、兵士はなによりも死に直面した恐怖心と過酷な最前線のなかで見えざる敵におびえつづけ弾雨の恐怖にさらされ、そして戦場での厳しき軍律という幻影にとりつかれ、心の平衡を失い、ある者は病気に、ある兵は脱走し、またある兵は高度な神経衰弱により発狂し自殺した兵士もあった。

戦友の死、南寧にて荼毘に付す、

撃たりしに 友のいまわに たらちねの

母の名呼ぶあり 哀れ人の子

死ぬ時は 共にと誓いし 戦友を

火葬に付して 骨をひろいぬ

そして最前線の南寧に約一ヵ月も半ば過ぎたころ、終戦による反転命令が下り、南寧を後に江蘇省の鎮江まで遠い道のりを歩き続け、鎮江で武装解除により、あらゆる武器が支那軍により接収された。そして鎮江の一ヵ月は、毎日毎日支那兵の監視により道路工事等にかり出され、重労働の日々が続いた。

この鎮江にて復員の乗船許可が出たということでも海までできましたが、思いおこせば、作戦開始以来中支の石家を出撃してより南支那の佛領インドに四、五十里の手前南寧までの道のりを考えると、約二千キロぐらいになり、それをまた終戦の反転命令により上海までの道のりは、それは服従を強いられた、およそ四千有余キロに及ぶ道のりであったわけだ。

従って上海に着いた時の喜びは、長い行軍のつかれも忘れ、共に辛苦を分かち合った戦友と固く握り合った手と手のぬくもりそして嬉しさは忘れることなく今も

残っているのを感じます。

ところが上海に着いてから運か不運か、私は現役兵の中から選ばれ、戦犯で現地に残留される将官の護衛という名目で、上海兵站勤務を命ぜられ、戦場で辛苦を共にした戦友と別れることになりました。兵站勤務の被服係として前線奥地より帰還し乗船復員する兵に、被服の支給等を勤め、復員する戦友の後姿を見送りながら、祖国の土を踏める日を思い浮かべ一日も早く自分も復員をと願いつつ十カ月の月日が過ぎた。

従って前にも述べたように、運が良かったとすれば、この上海兵站勤務の十カ月間に戦地での疲労などが完全に良くなり、心身共に健全で復員出来る日を待てるわけであった。

さて、昭和二十一年五月十日である、遠い異国上海の空で夢にまで見た祖国へ復員出来ると決まった時は、十カ月間の上海兵站勤務で身体の疲れは良くなったとはいえ、戦いに敗れた心の憂さと共に祖国日本に戦友と帰れる喜びとが交叉する複雑な気持ちのなかで、しかしなつかしい日本へ、また父母の許に帰れる

喜びは今にして思えばいいようなない気持ちでいっぱいだった。

復員船の中では、敗戦下の祖国は、また故郷はどんな姿に変わっていることだろうと、戦友とそれぞれの思いで博多港で下船した。

国を出る時二度と踏むことが出来ないと思った祖国の土を踏んだ時の嬉しさ、この喜びを遠い異国で共に戦って散っていった戦友にもと思う時、じーンと目頭が熱くなり、ひしひしと、ああ生きて帰って良かったとこの時ほど感じたことはなかった。

こうして私達は、過酷な最前線戦場において人間としての誇りも完全に打ち砕かれ、ただ服従を強いられた四千有余キロの道のりに、すべての意味での極限を、この五体で生々しく体験した年代であるわけです。

私達は、あのいまわしい暗黒の泥沼に引きずり込む戦争の恐ろしさと、むごたらしさを、現在平和で豊かな時代に育って行く、子はもちろん孫にも、そして諸々の人たちに生ある限り語りつぎ、そしていつまでも平和にと祈らずにはいられません。